様式 1

論文審査の結果の要旨及び担当者
Summary of the Dissertation Review and the Approval

氏名 Name	Susmita Bastola			
論文審査担当者 Committee members		職 Title	氏名 Name	
	主査 Chair	大阪女学院大学教授	奥本　京子	
	副査 Member	大阪女学院大学教授	前田　美子	
	副査 Member	大阪女学院大学教授	髙橋　宗瑠	

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨
Dissertation abstract and summary of the dissertation review

論文の内容の要旨

本論文は、1996～2006 年の間、ネパール内戦により 17000 人もの超法規的殺害や 2500 人もの強制失踪（enforced disappearance, ED）の犠牲者をもたらした政治的・社会的・軍事的暴力をめぐる研究である。特に、国軍とネパール共産党（マオイスト）の狭間にあって、ED の犠牲者のうちの三分の一にもあたるタルー人・コミュニティが、なぜそのような過酷な状況に追い込まれたのかに、学位申請者が問題意識を持ったことに端を発する。その一方で、武力紛争後のネパールにおける「平和プロセス」を批判的に検証しながら、ヒマラヤ山脈の麓のタライ平原に長年暮らしてきた複数の先住民族からなるタルーの人々のための平和（和解）とは如何に可能かを考察したものである。

第 1 章では、研究対象に関連する歴史的背景についての概要、そして平和紛争学やヨハン・ガルトゥングによるトランセンド理論などの理論的枠組が説明される。また、暴力、ED、和解といった鍵概念についての先行文献が提示される。その他、リサーチクエスチョンが示される。

第 2 章では、研究方法論につき、具体的に示される。質的ケーススタディ、ケース選択の根拠、データの扱いや対象の選択、データ収集、分析・解析、倫理的課題等につき、綿密な計画とそれが可能にした実践が浮かび上がる。申請者は、ネパールにおけるフィールドワークの実践において、その繊細で誠実な態度によりリサーチを行ったことは、特に高く評価される。

次に、第 1 章で提示されたトランセンド理論における「診断・予後・治療」のメソッドを応用して議論が開始する。第 3 章では、「診断」に相当する局面として、ネパール武力紛争における暴力、そしてタルーの人々の ED の犠牲の実態について分析される。従来からの様々な経済的・社会的・民族的差別や抑圧に加えて、武力紛争下では、政府軍と共産党軍の政治的・軍事的駆け引きの犠牲となる形により、タルーの人々は多くの労苦を強いられ、犠牲となってきた。

第 4 章では、「予後」に当たる局面として、武力紛争後のタルーコミュニティが、ED の犠牲の現実と向き合いつつ、どのように生き延びてきたかを分析する。様々な社会的・文化的・政治的・経済的課題に対峙しながら、犠牲者それぞれが優先する事項を一括りにはできない。ここでも、タルーの人々の生き辛さを、申請者がフィールドワークで得た貴重な証言から浮き彫りにする。

第 5 章では、「治療」の局面を扱い、和解の可能性を論じる。癒しと終結・予防がどのような具体的な要素によって成立しうるかの議論から始まり、和解のピラミッドモデルを提案する。このように、申請者独自のフレームワークの提示を試みることで、和解の実現性を探求する。

第 6 章では、本稿全体のまとめと、学位申請者として、武力紛争後のネパールに対する提言を述べている。

論文審査の結果の要旨

上記 3 名の論文審査担当者としては、一部の先行研究の扱い方や英語表現についてなど幾つかコメントはあるものの、本稿が本学大学院博士後期課程（国際共生）の論文として相応しい論稿であることを全員で認めるに至った。